池田の都市形成とその構造の変容に関する研究

酒井　啓[1]・岡田　昌彰[2]

1　学生員　工学士　近畿大学大学院　総合理工学研究科（〒577-8502　東大阪市小若江 3-4-1）
2　正会員　博士（工学）　近畿大学講師　理工学部社会環境工学科（〒577-8502　東大阪市小若江 3-4-1）

本研究では，近代都市池田形成の契機となった池田城城下街の消滅から昭和初期に至る都市形成過程を整理し，その特徴を明らかにした．昭和初期の都市形成過程に至るまでに中心地の変遷が３度あり，いずれも異なった性格を持ちながら図らずも３つの個性的なエリアが存在していた．加えて，現在は都市構造を支えていた商業形態と交通機関の変化により各エリアの個性が希薄化する傾向にあることを示した．

Key Words: *Ikeda, Urban Structure, Street, Railway, Industry*

1. 研究の背景と目的

1975 年の文化財保護法改正によって伝統的建造物群保存地区の制度が発足し，さらに 1996 年の同法改正で文化財登録制度が導入されて以来，戦前期に形成された街並みが保存や観光の対象として捉えられるようになった．

大阪都心から約 16km 北西に位置する池田市は現在大阪の衛星都市として知られているが，戦前期には大阪への近接性や温暖な気候，良好な水質などが実業家小林一三氏に注目され，計画的な住宅都市として開発された歴史ももつ．また，当地にはかつて絹織物業や酒造業などの伝統的産業が発達し，インスタントラーメンなど個性的な産品の発祥地としても知られている．近年では 1999 年のインスタントラーメン発明記念館の開館や 2000 年の池田城跡公園開園など，地元の歴史を意図的にアピールする施設が整備されているほか，2004 年には昭和初期の池田を舞台としたドラマ「てるてる家族」が放映されるなど，池田の歴史を積極的に見直す動きが見られる[補注(1)]．いっぽう，特徴的な複数のエリアが共存していた昭和初期の池田の特質，さらにその変容に対する検討は殆ど行われておらず，点的な施設整備による歴史アピールが主要となっている現状にある．

本研究では，中世から近世にかけて街道を中心として形成された池田の都市構造と，その後の近代化による３エリアの形成過程，さらに現在に至るこれら３エリアの差異の希薄化の過程を明らかにすることを目的とする．

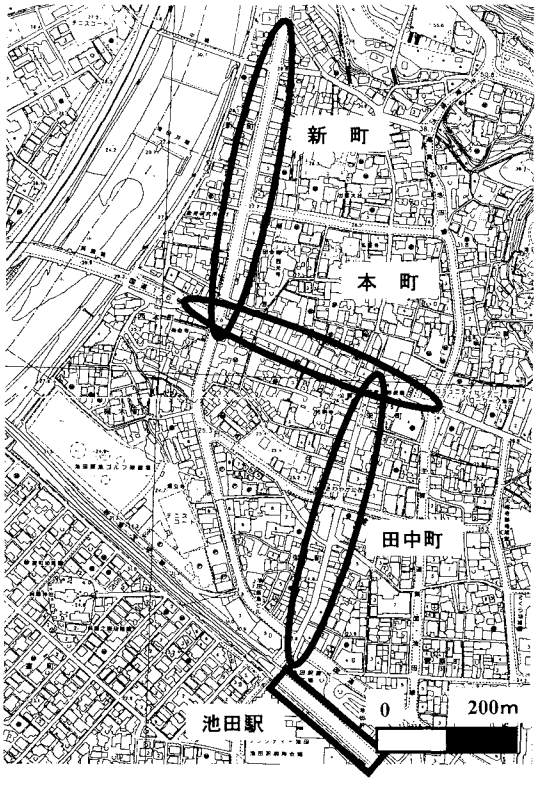
江戸期から戦前期の都市形成に関しては，松江市を対象とし都市施設の分布と街路計画に着目した脇田らの研究[1]などがある．また，小林一三の住宅地開発構想の端緒である室町住宅に関する吉田の研究[2]や，昭和初期の地元在住者による当時の復元地図作成による歴史詳述[3]などが行われているが，池田の都市構造特性をその形成過程というスパンで捉えた研究は存在していない．

2. 昭和初期にいたる池田の都市形成過程

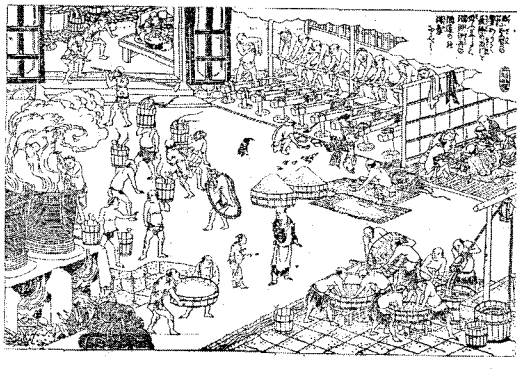
(1) 本町の興隆と新町の形成期（江戸中期以前）

池田村（現池田市）は江戸中期以前，京都から九州太宰府に至る西国街道と，大阪から能勢（妙見山）に至る能勢街道の交差する位置にあり，能勢地区と周辺農家からの産物の流通拠点として栄えていた．初期の町屋は池田城城下町として形成されたが，1568 年の織田信長による池田侵攻で火災に遭い，町屋全体が崩壊する．かつて郡内一の発展を遂げていた池田村内の商工業地域も焦土化し，一時は住人が 80 人にまで減じたと記されている[8]．このことが結果的に，近代的商業都市を形成するための下地となったと考えられている[4]．

豊臣秀吉の全国統一（1590 年）後，多田銀山道と亀山道の主要街道にあたる池田村には代官がおかれる．地場産業として酒造業が台頭し，商品作物の流通路として能勢街道が機能した．他の特産物として細河の植木，能勢の炭などもあり，池田氏などの家臣団が土着し，さまざまな特権（朱印状，市）を



図―1　池田の地名配置図



図－2　江戸期池田の酒造業（摂津名所図会）[5]

用いて“本町”を形成していった．（図―1）

江戸時代に入り池田村は徳川幕府の直轄地となるが，朱印状によって特に酒造業はめざましい発展を遂げる（図―2）．1697 年には満願寺屋，菊市屋，大和屋など大醸造家をはじめとする 38 戸の酒造業が立地し，江戸への「下り酒」として関東にまで販路を広げていた．

表－1　豊能郡の炭（池田炭）の生産量[10]

	年産量（貫）	窯数
明治以前	43,620	30
明治 13 年	84,620	60
明治 30 年	358,440	111
明治 34 年	413,400	197

いっぽう，舟運と街道の接点の位置には“新町”が形成された．新町は能勢街道沿いという好立地条件をもって 1634 年には馬借が設置されており、後に舟運の拠点ともなる．

(2)　酒造衰退と新町の興隆期（江戸中期～明治末）

このように，一時は池田の代表的産業として発達した酒造業であったが，江戸中期に老舗と新興の酒造業者間に紛争が起き，これが問題化した．この紛争を解決するため，奉行所は 1774 年に朱印状を没収し，その結果“特権”を喪失した池田の酒造業は打撃を受けることとなる．さらに江戸後期には高品質と廻船輸送の利便性をもつ「灘五郷」（灘酒造）が台頭し，江戸への下り酒もこれに移行し始めた．江戸後期 1832 年には酒造が 17 戸にまで減少している．

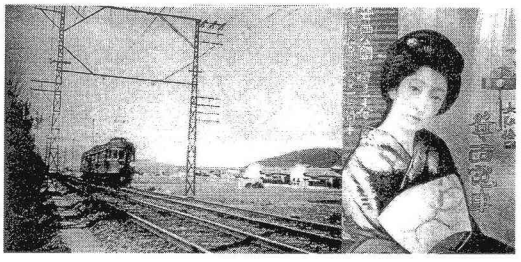
いっぽう，朱印状の没収以後町毎に定められていた業種別の規制も緩み，売買商品の輸送に有利な能勢街道筋の馬借所付近の“新町”に商業者が集中する．かつて 1641 年に猪名川の通船願が出された際には池田，瀬川，伊丹の馬借による反対によって舟運が実現しなかったが，1784 年には猪名川通船の許可が降り，猪名川沿いの新町はさらに活況を呈した．

明治時代には池田の代表的な繁華街となり，川遊び場やﾚｼﾞｬｰﾎﾞｰﾄ場，川沿いの料亭や旅館，芝居小屋呉服座，映画館明治座などの娯楽施設も備えた商店街を形成した．近郷産の木材売買で発展した南新町と各種商店の建ち並ぶ中新町には「新町小売市場」が開設された．北部の北新町では豊能郡特産の木炭問屋が軒を連ね，「池田炭」として京阪神地域でひろく知られるようになった．（表―1）[補注（2）]

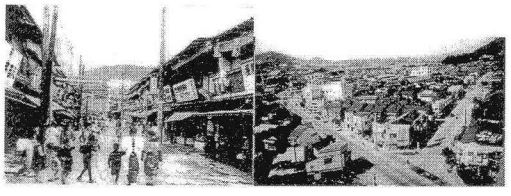
明治以降は能勢郡役所も置かれ，郵便局（1871 年），池田出張所（1874 年：後の警察所）などの近代施設も整備された．文明開化期以降は小学校とともに“呉服学館”なる英学塾も開設され，区裁判所などの官衛も設立されている．日清戦争後の経済膨張期には，大阪府立池田中学校，蚕種検査場豊能郡農事試験場（1901 年），大阪府池田師範学校（1908 年），池田酒造業による「摂池銀行」（1895 年），地元青果問屋設立の「池田実業銀行」（1903 年）などの地元資本による金融機関も新町通りに立地する．

(3)　鉄道敷設と田中町の興隆期（明治末～昭和初期）

このように新町を中心として近代都市化が確立した池田において，1910 年の箕面有馬電気軌道（現阪急電鉄）開通はその都市構造をさらに大きく変化させた（図－3）．これにより池田は近代高速交通によって大阪梅田と結ばれることとなり，これに合わせて池田駅の近接地に“室町住宅”[補注（3）]が整備された．この時期より人口は急増し，田中町を中心とする地域に町屋が新たに形成される．このことは，城下町の時代より本町・新町を中心に展開していた商



図—3　左）創業当時の箕面有馬電気軌道[6]
右）創業当時のポスター[6]



図－4　左）栄町通り（1939 年頃）[7]
右）鉄道沿線に整備された産業道路（1961 年頃）[6]

業中心地が南下し，池田駅北の田中町商店街（現栄町商店街）に移動することを意味した．1930 年には大阪郊外初の百貨店ビル「糸屋百貨店」も立地し，箕面・豊中・川西・宝塚といった周辺地域からも集客を得る．池田駅北は北摂地域を代表する繁華街となったことから，1944 年には田中町地域が「栄町」と改名されるに至っている（図－4）．

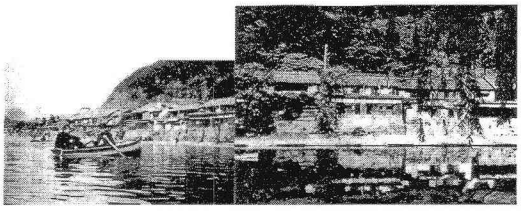
その後，田中町通の拡幅を経て 1935 年には産業道路なる主要幹線道路が鉄道沿いに整備された（図－4）．これによって鉄道以外の物資輸送拠点も旧市街地から鉄道拠点へとシフトし，都市構造の変革は決定的なものとなったといえる．これによって旧来の大問屋も小売店へと次第に変化し，池田は大阪の近郊住宅都市・小売り商業都市として発展していく．

1939 年には池田に「発動機製造株式会社」（現ダイハツ工業）が誘致され、工業都市としての性格も帯びるようになる。戦後 1957 年には三輪乗用車や軽三輪自動車ミゼットが製造され、「まちのヘリコプター」として親しまれているほか、「ダイハツ町」なる企業名を冠した町名も現れる．また、1958 年には室町住宅近くの呉羽町で日清食品の創業者安藤百福会長が世界初の即席麺を誕生させている．

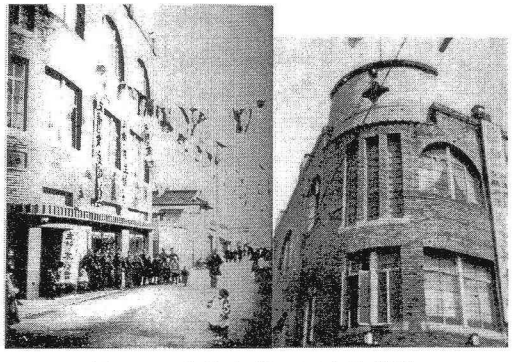
3. 昭和初期の都市構造特性

以上のように，池田は昭和初期の近代都市に至るまでに，主要交通機関の変化とそれに伴う中心地区のシフトによって，各エリアに個性的な街並みが残ることとなった．このようないわば各時代の栄華を反映させたまま残存した異質の空間が共存していた点に，昭和初期における池田の都市構造の特徴の1

図－5　昭和初期の本町[7]



図—6　昭和初期の新町（能勢裏）[6]



図－7　昭和初期の田中町[3)6)]

つがあったといえる．

（1）本町通り

江戸時代中期以前より発達した酒造業が昭和初期にはまだ現存しており，酒屋（17 軒）とその蔵（22 軒），納屋が建ち並んでいた．（図—5）

（2）新町通り

昭和初期には能勢街道沿いに問屋が密集状態にあり，米屋，酒屋，餅屋，塩屋，味噌屋などの食料関係から古手屋，小間物屋，荒物屋，炭屋，油屋，煙草屋，瓦屋，鍛冶屋，紺屋，髪結など多くの職種が借家も含めて 240 軒余り軒を連ねていた．

町内には新町の風情「能勢屋裏」の景色を楽しむための貸しボート屋などが立地しており、川沿いに料亭や旅館，芝居の呉服座，映画の明治座など，娯楽も備えた商店街が形成されていた．（図－6）

（3）田中町

明治末までは開発が遅れていたが，池田駅から最も近傍にあり，昭和初期には大阪への通勤者などを対象とした近代的な小売り商業地域を形成していた．（図—7）

（４）まとめ

昭和初期の池田は，商業都市の形成過程において過去に３度の中心地の変遷があり，その痕跡として各時代を反映する３つの個性的エリア（本町・新町・田中町）が半径約 400m 域内に共存していた．各空間はそれぞれ本町通，新町通，栄町通の３メインストリートを中心に展開し，それぞれが明確な空間的差異を具備しながら共存いていたものと考えられる．

4. 都市構造の現況

（１）新町

1941 年には新町通が車道として整備されたが，戦後店舗数は激減した．これによって，商店によって特徴づけられていた新町の性格は大幅に変化したものと考えられる．また，1998 年には新町の北方に阪神高速道路池田線が整備され、さらに多くの店舗が立ち退き，昭和初期に形成されていた商店筋は旧池田実業銀行（現“いけだピアまるセンター”（池田市商工労働課による企業育成室））などの特徴的建築物を除きほぼ完全に消滅しているといえる（図－８）．

（２）本町

1959 年にアーケード化が行われ，近年まで賑わいのある商店街を形成していたが，1995 年の阪神大震災を機に 1965 年に計画決定されていた中央線拡幅が進行中にある．アーケードは2004年に撤去され，商店街としての本町の性格も大きく変貌しようとしている．（図―９）

（３）田中町（サカエマチ商店街）

1959 年に本町と共にアーケード化が行われ，その後も 1980 年代に始まった池田駅前再開発に合わせて 1987 年にカラー舗装が行われ，「サカエマチ１・２番街」なる池田を代表する商店街を形成している．近年は空き店舗が増加する傾向にあるが、昭和初期の近代建築も僅かながら現存している．（図―10）

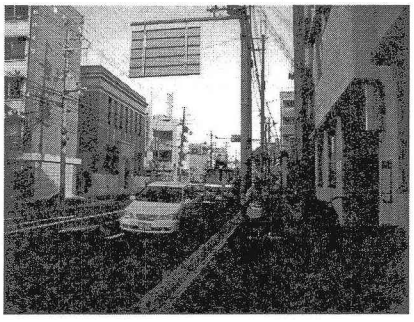
（４）３エリアの“差異”の現況

以上のように，昭和初期においてそれぞれの特色をもって形成されていた商業店舗が各エリアで激減もしくは減少傾向にある．隣接する川西能勢駅周辺における大規模商業施設の開発によって商圏人口がさらに低下する傾向にあり[9]，３商店街の商業機能はさらに低下しその差異も希薄化する可能性がある．

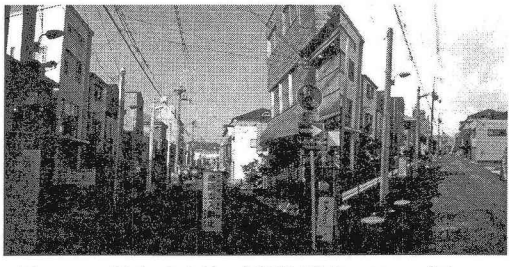
5. 総括

４章までの池田の都市形成とその構造の変容を総括すると図―11 のようになる．

昭和初期に近代都市として成立した池田においては，その形成過程の中で図らずも中心部が移り変わることにより，３つのエリアに各時代背景を反映させる街並みが存在していた．戦後の自動車交通路の発達や近隣都市の大規模商業施設の開発によって，各エリアの小売商業店舗は減少し，北摂の商業中心都市としての性格が弱まるとともに、かつてあった各エリアの特色も希薄化する傾向にある．



図－８　現在の新町（筆者撮影：2005 年）



図－９　現在の本町（筆者撮影：2005 年）

図－10　現在の田中町（サカエマチ商店街）（筆者撮影：2005 年）

前述のように現在の池田においては歴史を回顧するイベントや空間整備が進められているが，戦前の文化を展示する博物館や城跡公園の整備など，点的な整備が中心を成しているといえる．しかしながら，上述のような各エリアの形成過程を考慮するならば，歴史的過程が如実に反映された３エリアの存在と，その差異の共存にも池田の歴史的性格を見て取れる可能性があろう．歴史アピールを意図した事業においては今後，池田の歴史的経緯におけるこのような特徴にも着目した検討の余地があるものと考えられる．

【補注】

(1) たとえば，朝日新聞 2004 年 3 月 27 日号「連載・風景を歩く」においても，創造的活動の歴史をもつ特徴的な都市として池田が紹介されている．

(2)池田炭は高価であったことから，大正期以降は他の良質な地方炭に押され，需要が減少している．

(3)室町住宅は小林一三氏の代表的な事業の 1 つであり，日本初の分譲住宅としても知られている．

【参考文献】

1) 脇田祥尚・田中隆一 (1999) 城下町を基盤とした近代都市計画の展開，都市計画論文集 NO. 34，pp. 577－582

2) 吉田高子(2000)「池田／室町住宅」近代日本の郊外住宅，鹿島出版会，pp. 315－330

3) 池田の町並み復元グループ(1995)昭和初期の池田

4) 池田市商店連合会創立 40 周年記念誌 (1989)

5) 秋里籬島(1975)摂津名所図会. 下巻，古典籍刊行会

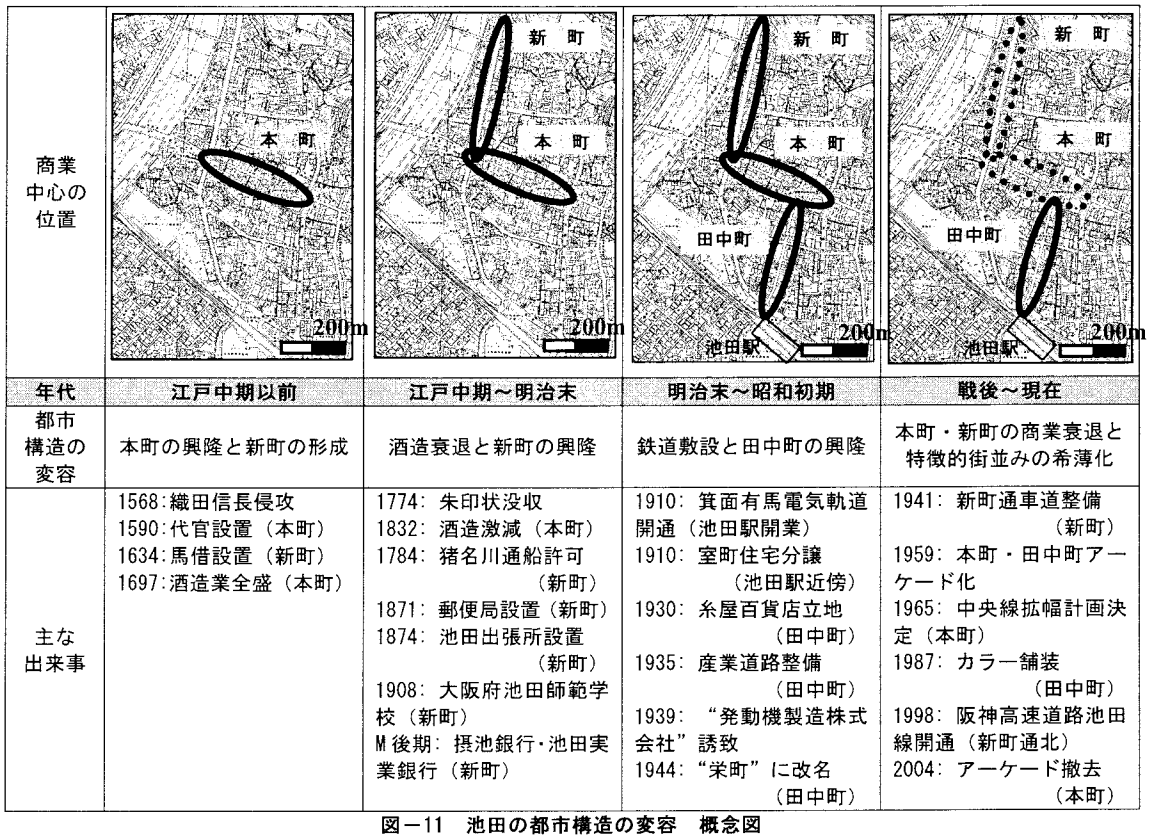
6) 富田好久監修(1995)北摂の 100 年，郷土出版社

7) 富田好久監修(2004)北摂今昔写真帖，郷土出版社

8) 池田市史編纂委員会(1971)新版池田市史概説編，池田市役所

9) 朝日新聞 1999 年 2 月 6 日号

10)清水正義(1986)池田の歴史略記③，自主出版



図－11　池田の都市構造の変容　概念図

STUDY ON URBAN FORM AND TRANSITION OF ITS STRUCTURE

Hiraku SAKAI and Masaaki OKADA

This study manifested the process of urban form and transition of its structure in Ikeda. It starts with demolition of traditional castle town which caused the modernization of Ikeda in 1568. There are three stages in the process of urbanization and each stage has different central district: Hom-machi, Shin-machi and Tanaka-machi. In early Showa Period (1930s), three of these areas with different commercial or industrial aspects coexisted. On the other hand, recent development of transportation infrastructure and change of commercial conditions makes these three different unique aspects rather tenuous.